様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　６ 日現在

機関番号：３２６８７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2019
課題番号：２６３７０３３９

研究課題名（和文）アメリカン・ルネッサンス期の先住民作家William Apessとその文学

研究課題名（英文）Native American Writer William Apess and His Literature in American Renaissance

研究代表者
小沢　奈美恵（Ozawa, Namie）

立正大学・経済学部・教授

研究者番号：８０２０４１９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、アメリカン・ルネッサンス期におけるピークォット族の作家William Apessの生涯と作品に関するものである。その成果は、『ピークォット族の著述家、ウィリアム・エイプス研究―アメリカン・ルネッサンス文学における新たな視点―』（仮題）という研究書として、明石書店から出版予定である。
　そこではApessの生涯と著作に関して論じた。メソディスト派牧師の資格審査に合格するための回心体験記に基づく自伝、マシュピー族の自治権要求運動への参加記録、17世紀におけるピューリタンと先住民の戦いに関する随筆、説教などの著作をアメリカで発行されている研究論文や歴史書を参照し、詳細に論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来、アメリカン・ルネッサンス期の作家研究には、William Apessのような先住民作家の視点は、取り入れられてこなかった。特に19世紀の先住民の研究は数か少ないので、新たな研究の視座を提供できると考えている。また、先住民と、主流白人作家や奴隷制廃止運動家の黒人などとの関係性が明らかになってきた。
　Apessは、メソディスト派に属することで言論の場を確保し、東部社会に対して批判を行い、先住民の境遇の過酷さを訴えることができた。研究書の最後には代表的作品2点の翻訳も添えることができ、当時の先住民の生き様や、ピューリタンによる対先住民戦争に関する先住民側からの解釈などを紹介できた。

研究成果の概要（英文）：　My studies investigate the life and works of Pequot writer William Apess (1798-1839) during the American Renaissance. The research outcome will be published under the provisional title A Study on Pequot Writer William Apess: A New Perspective on American Renaissance Literature by Akashi Shoten.
　The book covers the recent research trend on Apess as well as literary criticism of each of his works. Based on the latest research results, it illustrates his autobiography, which followed his conversion narrative and was published after his ordination as a Methodist preacher, his record of the Mashpee tribe’s movement to acquire autonomy, and his interpretation of warfare between native tribes and Puritan settlers. This book provides a new perspective for the conventional studies on American Renaissance by incorporating a Native American’s voice. thus revealing the relationship among mainstream writers, multiracial abolitionists, and native tribes that have survived on the East Coast.

研究分野：19世紀アメリカ文学

キーワード：William Apess　ピークォット族　先住民作家　先住民自伝　回心体験物語　アメリカン・ルネッサンス　19世紀のメソジスト派　ピューリタンの対先住民戦争

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、アメリカ文学研究は、白人男性作家という主流の研究から、多人種、多民族の作家、女流作家、大衆作家など周縁へと研究対象に広がりを見せている。その流れの中で、先住民表象やこれまで重視されなかった先住民の作家が、1990 年代頃から注目を浴び、徐々にその研究が進められている。例えば、アメリン・ルネッサンス期の先住民表象研究として、ルーシー・マドックス（Lucy Maddox） の『リムーヴァルズ:先住民と十九 世紀アメリカ作家たち』(開文社出版、1998 年）（*Removals: Nineteenth-Century American Literature*(Oxford: Oxford UP,1991)で、この時代の主流作家の先住民観が論じられた。また、ルネ・バーグランド（Renée L. Bergland）は、『国家に付き纏う不気味なもの―インディアンの亡霊とアメリカ人の主体』*The National Uncanny: Indian Ghosts and American Subjects* (Hanover, NH: U of New England,2000)で、先住民作家ウィリアム・エイプス（William Apess）も含めて、主流作家との関係性を明らかにしている。このように、主流作家の描く先住民表象や先住民作家の著作、その相互関係の研究は、徐々に進められつつある。

ウィリアム・エイプスという作家は、1992 年にバリー・オコネル（Barry O’Connell ）の編纂による全集『我が大地の上で―ピークォット族、ウィリアム・エイプス全集』(*On Our Own Ground: The Complete Writings of William Apess, a Pequot*(Amherst, MA:U of Massachusetts P,1992)が出版され、一層、研究対象として評価されるようになった。エイプス を含めた先住民作家を論じた研究書も、次々と出されている。キリスト教に改宗して、生き残りを図りながら著述活動を続けたエイプスのような作家の存在に新たな脚光が当てられ、その存在を含めたアメリカン・ルネッサンス研究の重要性が高まっているのである。

日本でも、先住民文学に関して、いくつかの記念碑的な研究書が出されているが、19 世紀初頭のアメリン・ルネッサンス期の先住民作家となると、いくつかの論文で取り上げている例もあるが、十分周知されているとは言えない。拙著『アメリカ・ルネッサンスと先住民：アメリカ神話の破壊と再生』(鳳書房 2005 年）でも、アメリカン・ルネッサンス文学の先住民表象を取り上げた。アメリカという国は、新大陸到達の後、植民地時代にピューリタン対先住民諸部族の戦闘が繰り広げられ、先住民の土地を奪うことによって成立しており、この問題にアメリカン・ルネッサンス期の主流作家は、葛藤しながら取り組んでいる。ここに先住民作家の声を入れてルネッサンス文学を再考し、主流作家との関係性を明らかにすることが必要である。そのため、前著で論じたウィリアム・エイプス論（第 1 章第 4 節）を今回の研究計画では、発展させ、一冊の研究書にまとめ上げることにした。

２．研究の目的

ウィリアム・エイプスの生涯、全著作の評論、他の同時代の先住民作家や植民地時代の作家との比較、主流作家の描く先住民像との関係を明らかにして、1 冊の研究書にまとめる。既に、Apess の 2 作品に関する研究論文を出しているので、残りの自伝『森の息子』(*A Son of the Forest,* 初版 1829, 改訂版 1831)と短編作品の研究を行う。同時代の主流作家の描く先住民観や先住民表象とも比較を試みる。いくつかの作品の翻訳も出版する。既に一作品に関しては、翻訳原稿ができているので、これを推敲してその翻訳本の中に組み入れる予定である。

３．研究の方法

（１）夏期休暇を利用して、マサチューセッツ州のハーヴァード大学Widener Library を訪ね、そこで資料収集を行う。ウィリアム・エイプス、植民地時代から 19 世紀半ばまでの著述家の先住民作家たち、アメリカン・ルネッサンス期の主流作家や著名人などが先住民について言及した文書、エイプスが作品の中で言及している歴史的文書（ピューリタン関係、探検記など)、キリスト教の一派メソディストに関する文献を調査する。

（２）ウィリアム・エイプス の作品論から取り掛かる。 エイプス 研究書の第 2 章 2 節にあたる自伝A Son of the Forest 論とエイプス の生涯の部分で一つ論文を作成し、学会で発表する。先住民の自伝は数多くあるため、それらとの比較も試みる。第 1 節の自伝というジャンルについては、単独の論文にはなりにくいので、研究書だけのためにまとめる。

４．研究成果

6 年に亘りウィリアム・エイプスの研究を続け、1 冊の研究書にまとめ、2 作品の翻訳も編集し、2020 年度秋には出版する予定である。遅れてはいるが、ほぼ、最初の研究計画通りの内容で完成予定である。科研費によって発表した（未出版を含む）論文を基にした箇所は、その論文名に☆印をつけて【　】内に示す。

仮題『ピークォット族の著述家、ウィリアム・エイプス研究―アメリカン・ルネッサンス文学における新たな視点―』(明石書店、2020 年出版予定)

（１）ウィリアム・エイプス研究動向

ポストコロニアル批評によって、マイノリティの視点が重視されるようになり、1990 年代に

エイプスという作家も新たに発掘され、研究対象となったが、キリスト教の先住民の研究が盛んになってきており、また、主流アメリカ人作家との関連性でも批評の対象として論じられるようになっている。2010 年以降は、エイプスの伝記も刊行され、エイプスに関して詳細が明るみに出てきた。、その二つの伝記研究は、フィリップ・F・グラ(Philip F. Gura, 2015) の『ピークォット族、ウィリアム・エイプスの生涯』(*The Life of William Apess, Pequot*)、ドゥルー・ロペンジーナ (Drew Lopenzina) の『インディアンの鏡を通して―ピークォット族、ウィリアム・エイプスの文化史的伝記』(*Through an Indian's Looking-Glass: A Cultural Biography of William Apess, Pequot,* 2017)であり、エイプスのニューヨークにおける死までの行動が資料を基に裏付けられただけでなく、その生涯のみならず、東部に生き残った先住民の社会的状況、奴隷制廃止運動とのつながりなどが、いっそう明らかにされた。

（2）アメリカ先住民自伝というジャンル【☆「アメリカ先住民自伝というジャンル」立正大学経済学部『経済学季報』第 65 巻第 3・4 号、2016 年 3 月、pp.79-98】

エイプスの自伝『森の息子』を論じる前に、先住民自伝のジャンルについて、その定義を明らかにした。アメリカでは、ベンジャミン・フランクリンの自伝が、自伝というジャンルを形成したが、先住民自伝については、アーノルド・クルパット (Arnold Krupat) は、1985 年、先住民自伝は、語る先住民本人（口承物語の語り手)、白人の編集者・筆記者と、混血の通訳・翻訳者によって作成される「本物の二文化併存的な混成的構成物」(original bicultural composite composition) と定義した (Krupat, *For Those Who Come After* 31)。エイプスのようにキリスト教に改宗した先住民は、先住民としての伝統を失っているので対象外とされたが、その後、1992 年頃から、評価の対象とするようになった。一方で、純粋な先住民文化の伝統を引き継ぐものだけを先住民自伝とする研究者もいる。

この一方で、クルパットが後年、認めたキリスト教に改宗した先住民の自伝の研究が、近年盛んになっており、バーンド・C・ペイヤー (Bernd C. Peyer) 、シェリル・ウォーカー (Cheryl Walker) 、ヒラリー・ウィス (Hilary E. Wyss) 、ディヴィッド・J・カールソン (David J. Carlson) 、アイリーン・ラザリ・エルロッド (Eileen Razzari Elrod) らの研究がある。

また、エイプスの自伝には、キリスト教の伝統である「回心体験物語」(Conversion Narrative)、「奴隷の体験物語」(Slave Narrative)、白人が先住民の捕虜となる「捕囚物語」(Captivity Narrative)を逆転させた体験談、先住民の口承物語などの様々なジャンルが混合し、社会の周縁のアウトサイダーを中心へと組み込むナラティヴの起点となることに気づいた。

（3）ウィリアム・エイプスの先住民自伝『森の息子』について【☆「アメリカン・ルネッサンスにおける先住民自伝―ウィリアム・エイプスの『森の息子』論」、『異文化の諸相』（日本英語文化学会）37 号 2017 年 2 月 pp.23-36】

エイプスは、メソディスト派の巡回説教師をしていたが、牧師の叙任を得るための回心体験物語(Conversion Narrative)として、『森の息子』という自伝を発表した。回心体験物語はアメリカのピューリタンの伝統に根ざしたもので、純粋な聖徒だけを教会の一員、共同体の一員として加えていくシステムであった。この伝統は、19 世紀にはメソディスト派などの福音派に受け継がれていった。ピークォット族のエイプスが、メソディスト教会に加入し牧師として認められることは、アメリカ市民として認められる道を拓く行為でもあった。その一方で、回心体験物語には個人的な体験を述べる必要性から、ピークォット族の苦境を述べ、社会批判を行うことを可能にした。キリスト教に改宗することで、一度、支配者の社会に恭順を示しながら、その支配に抗議し、先住民の地位向上を求めることができた。

また、逆転した捕囚物語(Captivity Narrative)の側面としては、エイプスが植民地支配下の社会に捕らわれの身となった状態を描き出し、実際のピューリタン対先住民の戦争だけでなく、白人の文字による歴史や物語によって先住民文化が奪われたことを訴えた。また、「インディアン」という誤った呼称を「ネイティブ」であると正し、先住民の土地を白人が奪ったことなど、先住民の視点を提供した。

さらに、当時、奴隷制廃止運動と共に発展していった「奴隷の体験物語」(Slave Narrative) のように、先住民への市民権や選挙権を当然与えられるべき権利として訴える部分もある。

このようにいくつかの物語形式のジャンルを利用しながら、エイプスは、被支配者の窮状を明らかにし、好戦的な先住民のイメージを払拭し、主流社会へ組み込まれる可能性を持った存在であることを主張することに成功している。

（4）19 世紀のメソディストと千年王国論【☆「先住民作家ウィリアム・エイプスとキリスト教：千年王国論に託された先住民の復権」『New Perspective』（新英米文学会）第 208 号、2019

年2月15日pp.30-41】
　ピューリタンの伝統の中で千年王国論が重要な位置を占めており、エイプスはその理論を巧みに用いて、先住民の地位を高めようとした。新大陸を約束の地として、そこに住む異教徒の先住民をキリスト教徒に改宗することは、千年王国を実現させるために不可欠とされていた。先住民は、旧約聖書に記録されている、イスラエルの消えた十部族とも解釈され、そのキリスト教への改宗とイスラエルへの帰還が求められてた。17 世紀のピューリタン牧師である、ジョン・コットン（John Cotton）も千年王国の理論家であり、ジョン・エリオット（John Eliot）も先住民の布教に努め、聖書をアルゴンキン語に翻訳した。インクリース・マザー（Increase Mather）、コットン・マザー（Cotton Mather）、ジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards）にもその伝統は受け継がれていった。19 世紀でも、初代アメリカ聖書協会会長である、イライアス・ブディノー（Elias Boudinot）らの著名人が、この説を信奉していた。エイプスも、ブディノーに影響を受け、この説を強く主張している。
　18 世紀の福音主義の復興運動の時期に、先住民への布教は千年王国実現のためにヨーロッパから大西洋を超えて、北米、カリブ海、アフリカなど行われ、植民地支配も同時に進行していった。その中で、土着の人々が宣教師として布教の活用されていった。北米では、メソディスト派も先住民、黒人、下層労働者階級への布教を広げていき、やがては改宗された被支配者たちに自治の意識が芽生え、社会の中で同化し生き残る力を与えていった。
　18 世紀から 19 世紀にかけて、エイプスのように活動したキリスト教徒の先住民も明らかになった。代表的な人物としては、モヒガン族のサムソン・オッカム（Samson Occom）、マヒカン族のヘンドリック・オウポマット（Hendrick Aupaumut）、チェロキー族のディヴィッド・ブラウン（David Brown）らであった。
　エイプスは、説教の中で、イスラエルの消えた十部族である先住民を迫害したアメリカは国家的罪業を犯したとする。そして救世主の正義によって統治される平等の国である千年王国の実現を信仰する。エイプスは、千年王国の理想と掲げてそこに近づいたはずのアメリカ合衆国という国家の矛盾を暴き、支配者にその政策の欠陥に気付かせ、悔い改めを迫っている。

（5）回心体験物語と『ピークォット族の五人のキリスト教徒インディアンの回心体験物語』について【☆「先住民作家ウィリアム・エイプスの『ピークォット族の 5 人のキリスト教徒インディアンによる回心体験記』論――インディアンの鏡に映しだされるアメリカ社会」『英語文化学会記念論文集（英語文化学会）出版予定】
　エイプスが紹介したピークォット族のキリスト教徒の回心体験物語と、それと対になった随筆「白人に示すインディアンの鏡」について調査した。エイプスが、回心体験物語という形式によって、自分だけでなく、4 人のピークォット族の女性の置かれた窮状を描き出している。下層階級の者にも機会が与えられたジャクソニアン・デモクラシーの中で先住民の居場所を探り、独立宣言の中に保障された自然権、すなわち、すべての人間に対する平等な待遇や、生命、自由、幸福を追求する不可侵の権利を獲得し、先住民がキリスト教会の一員であると同時に合衆国の一員となろうとしたことを明らかにした。
　この著作を出版した当時、エイプスは巡回牧師としてボストンにも足を運んでおり、そこの奴隷制廃止運動から影響を受け、奴隷制廃止運動に中心的役割を果たしたウィリアム・ロイド・ギャリソン（William Lloyd Garrison）らと関りを持ち始めている。また、それと同時に 1830 年に成立したインディアン強制移住法とチェロキー族の移住問題の是非を巡る激論の影響下にもあった。ジャクソン大統領は、白人下層階級には平等への道を開きながら、先住民には過酷な政策を取った。しかし、エイプスは、ボストンでチェロキー族のジョン・リッジ（John Ridge）の代わりに講演を務め、演説の才を発揮していた。このように、奴隷制廃止運動やインディアン強制移住法問題の渦中にあったことも、この作品を読み解くために重要な鍵であることがわかった。

（6）アメリカン・ルネッサンスの作家たちの先住民観：ヘンリー・デイヴィッド・ソローとエドガー・アラン・ポー
　エイプスの時代の代表的な作家を、例として、その作品の中にどのように先住民問題が描かれ、エイプスの考えとどのように接続していくのかを考察した。従来、アメリカン・ルネッサンスの作家の中に含めて論じられることが少なかったエイプスを、そのコンテクストの中に置き、そこから照射される問題点を探った。

①　『メインの森』のペノブスコット族との出会いから観るヘンリー・デイヴィッド・ソローの先住民観【「『メインの森』のペノブスコット族――ソローが描かなかったもの」『ソローとアメ

リカ精神―米文学の源流を求めて（ヘンリー・ソロー没後 150 周年記念論集）』日本ソロー学会、金星堂、2012 年、pp.77-90　/「植民地時代の記録文学―ソローの『メインの森』への影響」『ヘンリー・ソロー研究論集』（日本ソロー学会）第 40 号、2014 年 9 月、pp. 48-57】

この『メインの森』（*The Maine Woods*）という作品でソローが出会うのは、エイプスとほぼ同時代のメイン州のペノブスコット族である。ソローは、最初、自然と共生する高貴な野蛮人を追い求めるために、それ以外のところを観ようとしていない。その地方に先住民との交流を持ったローカルな女流作家の描写と比較しても、ソローが観念的な先住民像を抱いていることがわかる。ペノブスコット族の置かれた社会的状況に関して、ソローは、何も語らず、白人が彼らを征服した過去の歴史にも口を閉ざしている。変わりゆく時代の中で、生き残ろうとする人間としての部族や、その豊かなコミュニティに出会いながらも、そこには関心を示していないが、徐々に人間としての先住民を理解し始めていた。

また、ソローが読んだ歴史的文書の一つ『紀行文集』（*Collectiones Peregrinationum in Indiam, Orientalem et Occidentalem*,1590-1634）を取り上げ、ソローの先住民観への影響を考察した。ドイツ系プロテスタントの銅版画家兼出版者、テオドール・ド・ブライが世界の探検記録をヨーロッパに伝えたこの作品は、ピューリタンが新大陸を植民地化する上で、宣伝広告のような役割を果たしていた。銅版画の挿絵がふんだんに使われ、南米の先住民の野蛮性をわざと際立たせ、植民地支配を奨励する傾向がある。ガイドのジョー・エイティオンと野営をする場面で、ヘラジカの肉が炙られている様子から、ソローはブラジルの土着民が食人を行うときの残酷な銅版画を連想する。ソローにとって肉食自体が野蛮な行為であり、文明的でなかったが、ピューリタン的な植民地支配のプロパガンダに、ソローはある程度、影響を受けていると言える。

ソローが求めたものは、手つかずの自然と文明に晒されていない無垢な先住民の姿で、現実の先住民ではなかったので、エイプスのような先住民の活動家は眼中にはなかったと思われる。

②Ｅ・Ａ・ポーとエイプスの接点【☆「「E・A・ポーと先住民作家ウィリアム・エイプスの接点――『アーサー・ゴードン・ピムの物語』に隠された「 アメリカ先住民=消えたイスラエルの十部族」説――」『ポー研究』（日本ポー学会）第 12 号、2020 年、pp.17-32.】

ポーの『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』［以下『ピム』と省略］（The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket）における最終場面のツァラル島の記述に焦点を当てて、本来、全く共通項がないように見える二人の作家の観たビジョンの類似性を探った。「アメリカ先住民はイスラエルの消えた十部族である」［以下、十部族説と省略］を通じて二人の作家が、交錯した接点を見出した。

『ピム』の最終場面のツァラル島の洞窟内の壁に描かれた文字は、旧約聖書の時代に遡る古代の言葉で、エチオピア語、エジプト語、ヘブライ語などに由来する。ポーはヘブライ語辞典を利用してそれらの言葉を組み合わせたと言われている。当時、アメリカ国内でマウンドビルダーと呼ばれる先住民の遺跡が多く発見されており、新大陸はピューリタンに与えられた約束の土地であることに疑問が呈されていた。また、十部族説は、当時、著名な人々の間で信奉されていた。ポーは、同時期に書評のために、旧約聖書の預言に関する本を読んでおり、ヘブライ語への関心を示していた。また、ニューヨークの文壇で有名なユダヤ系の友人のモーディケィ・Ｍ・ノア（Mordecai M. Noah）からも、十部族説について情報を得ていたと推定されている。こうしたことから、ポーが十部族説をフィクションに利用しようとしていたことは十分考えられる。

伝記的にも、ポーが『ピム』を書きあげた 1837 年にニューヨークに居住していた折、エイプスも同様にそこに住み、先住民の歴史について講演活動を行っていた。そして偶然にもノアが十部族説について講演した同じホールで、エイプスも講演を行っている。また、当時のニューヨークは、ジョージ・キャトリンの大規模場な先住民に関する美術展が行われ、捕らえられたブラック・ホークや、先住民の使節団が訪問しており、先住民は話題となることが多かった。

ピューリタンの歴史や福音派キリスト教の中に根づく十部族説を、エイプスは生涯、利用して、白人植民者の行為を批判し、先住民の地位を向上させようとしていた。一方、ポーは、ピューリタンの歴史を祝い、共和制国家の繁栄、先住民の強制移住と西部への領土拡大を寿ぐ国家に対して、十部族説を用いて、疑問を投げかけたとも言える。このように、全く異なる二人の作家の中に接点を見出した。

＜引用文献＞

Krupat, Arnold. *For Those Who Come After: A Study of Native American Autobiography*. U of California P, 1985. p.31

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小沢 奈美恵	４．巻 第49巻2号総号208号
２．論文標題 先住民作家ウィリアム・エイプスとキリスト教：千年王国論に託された先住民の復権	５．発行年 2019年
３．雑誌名 New Perspective	６．最初と最後の頁 30-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小澤　奈美恵	４．巻 37
２．論文標題 アメリカン・ルネッサンスにおける先住民自伝―ウィリアム・エイプスの『森の息子』論	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『異文化の諸相』	６．最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小澤 奈美恵	４．巻 65巻3・4号
２．論文標題 アメリカ先住民自伝というジャンル	５．発行年 2016年
３．雑誌名 立正大学経済学季報	６．最初と最後の頁 79-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小澤 奈美恵
２．発表標題 アメリカン・ルネッサンスにおける先住民自伝―William ApessのA Son of the Forest
３．学会等名 日本アメリカ文学会
４．発表年 2015年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考